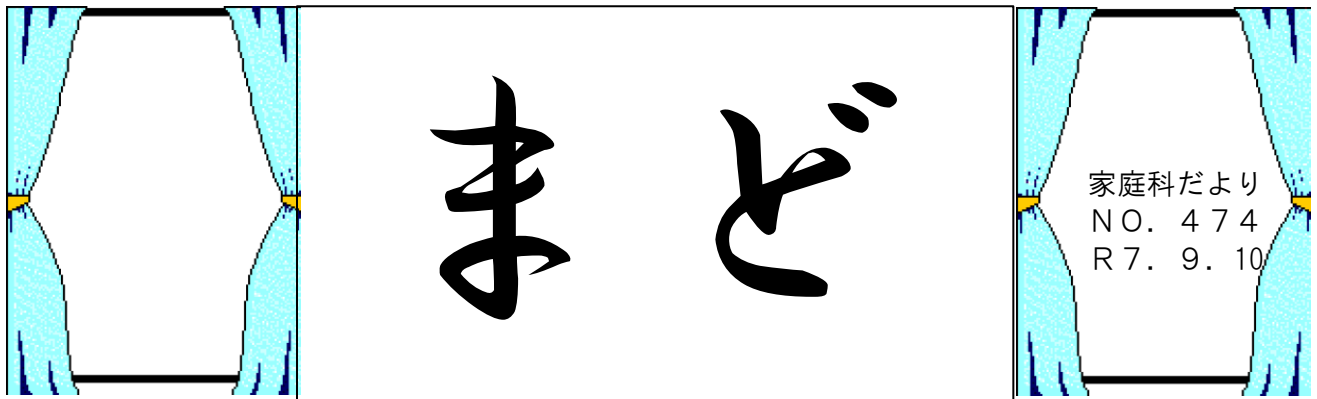




デジタル時代に求められる情報との向き合い方

先日、教職課程「家庭科教育法」で、3年生が「C 消費生活・環境（1）物や金銭の使い方と買い物」に関する模擬授業を行いました。その中で、身近な物を選ぶ際のポイントとして、①目的に合った品質のよい物を選ぶ、②環境への影響を考える、③自分で情報を取りに行く、の3点が挙げられました。①と②は教科書に基づく内容でしたが、③は学生独自の視点から導き出されたものでした。これは、デジタルネイティブ世代である彼らが、「情報は与えられるものではなく、自ら獲得するもの」と認識していることを示しています。情報化が進んだ時代ならではの姿勢と言えるでしょう。

かつて、情報はテレビやラジオ、新聞などから一方的に与えられるものでした。しかし現在は、どのような情報を、どのメディアを通じて受け取るかを自分で選び、取捨選択することが可能になっています。こうした背景のもと、2021年に施行されたデジタル社会形成基本法では、「誰一人取り残されない、人に優しいデジタル化」を実現する前提として、「すべての国民が、高度情報通信ネットワークを容易かつ主体的に利用し、情報通信技術を活用すること」が示されています。ここで言う「主体的に利用する」とは、情報を受け身で待つのではなく、自ら進んで情報を得て、それを活用する姿勢を意味しています。

家庭科においても、情報との向き合い方は重要な学習内容のひとつです。商品の表示やマークを読み取ることは、日常生活における選択の質を高めることにつながります。しかし、単に情報を読み取る力を身につけるだけでなく、「なぜ情報を読み取る必要があるのか」といった意味や、情報とよりよい生活との結びつきを考える視点も必要です。豊かな生活を創造するためには、情報の信ぴょう性を見極め、自ら進んで情報を得て、それを生活に活用していく力を育むことが求められます。

私たちの学びもまた、情報によって支えられています。学びを広げ、深めていくためには、必要な情報を自ら探し出し、それを活用しようとする姿勢が欠かせません。情報に対するマインドセットを見直し、人生や生活を豊かにする情報との向き合い方を改めて考えていくことが期待されます。

静岡大学学術院教育学領域 教授 小清水 貴子

和地小 5年「クッキング はじめの一步」

【実践内容】

本学習では、材料によってゆで方がかわることや、ゆでることによってかさが減るものは、多くの量を食することができるなどの調理の特性を理解することを目標としている。生活経験を生かした授業構成にするために、以下のように実践した。

（１）栄養教諭との連携

1週間前に給食で扱った小松菜とキャベツを例に、ゆでる前と後で野菜がどのように変化するかを考えた。ゆで方の手順の違いも、グループ分けした野菜の画像を提示し、それぞれの共通点から予想を立てた。



<児童に提示したスライド>

共通点は？	
お湯からゆでる ・すぐ、火が通るもの ・土の上で、育つ物 ・やわらかい物 ・しゃきしゃきしている物	水からゆでる ・なかなか火が通らない物 ・土の中で育つ物 ・かたい物 ・ゴリゴリしている物

（２）タブレットの活用

共通点や予想を班で話し合い、班ごとにオクリンクプラスのシートに考えをまとめた。共有は提出ボックスで行い、発表の際には画面共有も活用して行った。

<班活動のメモ>

【成果】

栄養教諭の協力により、実際に給食で出た野菜の写真を使用することができた。そのため、子供たちは給食や普段の食生活の経験から、実感をもって考えを表現することができた。見た目だけでなく、食感や香りなど、様々な視点で考えることができ、大変効果的だった。また、タブレットを活用したことで、グループ間の共有をスムーズに行うことができ、子供たちは限られた時間の中でも新しい見方や考え方に多く触れることができた。（文責：野中 彩乃）

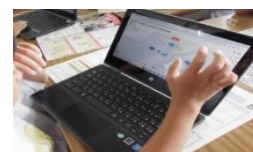
与進北小 5年「できるよ 家庭の仕事」

【実践内容】

本学習では、改めて家庭の中での仕事を見つめ直し、1学期に学習してきたことを活かして自分にできることを考え、実践する活動を行った。特別なことではなく、「これから継続して取り組めそうなこと」で取り組んだ。

（１）思考ツールを活用したグループ学習

事前に自分の家の仕事を調べ、オクリンクプラスに付箋で書き込んでおいた。それらをみんなのボードで共有しYチャートに食べることに関係すること、衣服に関係すること、家の中に関係することと項目を分けて考えた。



<タブレットを活用したグループ活動の様子>

（２）スライドを用いた実践のまとめ

（１）を踏まえ、自分でできそうなことや挑戦してみたい仕事を考え、家庭で実践した。自分の工夫ポイントを作り、それが分かるように、言葉や写真、図を使ってスライドにまとめ、後日各グループで見せ合い、発表した。

【成果】

Yチャートを使い、仕事を項目分けしたことで、仕事の分類や他の仕事との関係性に着目し、家庭の仕事が当初考えていたよりも細分化されていることに気付くことができた。付箋で色分けすることで自分以外の家族が担っている仕事が多くあることにより気付きやすくなり、これからはもっと家での仕事を頑張りたいという感想も多く見られた。スライドでは、実際の写真を見せ合いながら話をすることができたので、友達の家庭での実践の様子がイメージしやすくなり、意見が言いやすく対話の手助けとなっていた。（文責：河合 由似）

小学校家庭科研究部 第2回研修会報告

令和7年8月4日（月） 教育センター研修室

小中家庭科合同研修内容

○実践発表

「食べて元気に」～みんなにやさしいご飯とみそ汁～

都田南小学校 本山 栞奈 教諭

「食べて元気に」～思いが詰まったオリジナルみそ汁を考えよう～

和田小学校 授業者 内山 彩加 教諭

発表者 田中利実子 教諭

「生活の営みにかかわる見方・考え方を働かせながら、課題解決に向かう過程を重視した授業づくり」～「和服文化の継承」を学習課題として～

積志中学校 町田 秀子 教諭

○小中合同情報交換会

自校における家庭科の実践や小中連携について

○実技研修（小学校）

- | | | | | |
|-----------|----|-----------|-------|------|
| ・ ICT実技研修 | 講師 | 浜松市教育センター | 山下 大輔 | 指導主事 |
| ・ ミシン実技研修 | 講師 | （株）ジャノメ | 豊永 明 | 氏 |

○実践発表 指導講評

＜三ヶ日中学校 金子 直由 校長＞

【小学校実践について】

- ・ 小学校の2つの実践は共に、5年 ごはんのみそ汁を扱った題材であった。和食は日本の伝統的な食事の基本である。洋食との違いは、素材を生かし、だしのうまみを大切にしている点、上品かつ繊細であるという点である。
- ・ 両実践ともに、ICTを活用していた。ICT機器は自分の考えを整理したり、協働作業を進めたりすることができるため、児童や教師にとってメリットが大きい。これからも、積極的に活用して欲しい。

「食べて元気に」～みんなにやさしいご飯とみそ汁～

都田南小学校 本山 栞奈 教諭

- ・ 総合的な学習の時間と関連させて教科横断的に題材構成をしたことにより、家庭科の見方・考え方を働かせた深い学びにつながっていた。
- ・ 栄養教諭や暮らしのセンターと連携して学びを進めたことにより、学習課題について多面的にアプローチすることができていた。



「食べて元気に」～思いが詰まったオリジナルみそ汁を考えよう～

和田小学校 授業者 内山 彩加 教諭

発表者 田中利実子 教諭

- ・ サブタイトルにあるように、思いが詰まった味噌汁を作るための題材計画がとてもよかった。
- ・ 家庭と連携することで、児童が意欲的に調理する実践につながっていた。オリジナルみそ汁ということで、それぞれの思いが詰まっており、今後も自ら味噌汁を作っていけるような力をつけていた。



【中学校実践について】

「生活の営みにかかわる見方・考え方を働かせながら、課題解決に向かう過程を重視した授業づくり」～「和服文化の継承」を学習課題として～

積志中学校 町田 秀子 教諭

- ・ 近年は和服を持っている人や着る機会が減っている。そのような状況の中、生徒に和服の着身体験を行ったことは、とても有意義な体験になっていた。
- ・ 着身体験を通して、生徒は和装と洋装の違い、和装のメリット・デメリットを比較分類することができていた。そして、和服が着られなくなった理由や和服を守るための具体的な作戦を考えることにつながっていた。
- ・ この学習を通して、今後、和服を着る人や機会が増えたり、和装洋装それぞれのよさを生かし、生活シーンに合わせて使い分けたりしてよりよい生活を営むことにつながっていくだろうと思える実践だった。



○小中合同情報交換会

同じ中学校区や近隣の学校で構成されたグループになり、小中合同で情報交換をした。また、家庭科の授業について、自校で実践したことを紹介し合ったり、小中連携について情報交換をしたりした。

授業の中で活用した家庭科教材や授業での工夫について話し合うことにより、これからの授業に生かすヒントを得ることができた。



＜情報交換の様子＞

○実技研修（小学校） 指導講評

・ ミシン実技研修

指導講評 < 気田小学校 小澤 真喜子 校長 >

前半は（株）ジャノメ 豊永 明氏から、ミシンについての基礎的な知識や技能について教えていただいた。後半は、学生協の製作キットを使ってお弁当つつみやトートバッグの製作に取り組んだ。

小澤校長から、「家庭科の学習指導要領には、生活をよりよくしようとする実践的な態度を育成することと書かれている。目の前の児童を見ていると、学習したことをすぐに生活に生かして実践している姿を見ることは少ないかもしれない。しかし、家庭科で身に付けた力は、数年後、大人になってから生活をよりよくしようと工夫する姿につながっていく。前半の講座においてミシンの基礎的な扱い方を学んだ。今回学んだ知識や技能をもとに、2学期からの実践が楽しみになったこともあるのではないだろうか。そして、製作実習で得られた先生方の達成感をぜひ、目の前の子供たちにも味わえるようにして行って欲しい。子供たちの将来を見据え、今、できることに取り組んでいこう。」との助言をいただいた。

・ ICT実技研修

指導講評 < 花川小学校 池野 由香里 校長 >

浜松市教育センターの山下大輔指導主事を講師にお招きし、家庭科の学習におけるICTの活用について研修を行った。夏休み明けの学習からすぐに活用できる教材の見本を見せていただいたり、実際に自分で作成をしたりしながら取り組むことができた。よりよい活用場面を想定しながらの充実した研修となった。

池野校長から、「より実践的な活動が重要なのが家庭科の学習である。使うことが目的ではなく、それらの体験を支えるためのICTの活用を大切にしたい。」との助言をいただいた。



《実技研修の様子》



【編集後記】

今年度の夏の研修では、小中学校両方の実践発表を聞いたり、小中学校の教員が集まって情報交換をしたりして、改めて小中の連携の大切さを感じました。

実技研修では、家庭科におけるICTの活用とミシンについての実技研修を、2会場に分けて行いました。事前にどちらの実技研修に参加したいかアンケートをとったり、講師の方に質問したいことを募集したりしたことで、主体的に研修に取り組み、楽しみながら学ぶ先生方の姿が見られました。参加する先生方の希望や実態に合わせた研修ができ、充実した一日になったとともに、学んだことを2学期からの実践に生かしていきたいと思います。

高林 美奈（初生小）